C-4

限定のダケと対比のハに基づく、ダケハの意味の構成的分析

井戸 美里（国立国語研究所）・窪田 悠介（国立国語研究所）

要旨

とりたて詞ダケと対比のハを組み合わせたダケハという形式(「命ダケハ助けてほしい」等)は、ダケ単体、ハ単体には見られない 2 つの意味的特徴を持ち、これらの意味的特徴は文の意味を構成的に分析するアプローチに対して深刻な問題を提供する。1 つは、キャンセル不可能なはずのダケの排他命題が、ダケハ文で消失しているように見えること、もう 1 つは、ダケハ文は「(最低限)必須である」というモーダルな意味を表す場合に典型的に用いられる文脈制限があることである。本発表では、これらの意味的特徴がダケやハに特殊な仮定をすることなく構成的に説明可能であることを示す。まず、ダケ単体は通常モーダル要素より低いスコープをとり、ダケハの形式になった場合、ハのスコープ位置（モーダル要素より上）でダケが解釈されると仮定する。そうすることで、ダケの排他命題が対比のハの留保含意に近似すると分析でき、結果的に上述の 2 つの意味的特徴が発現すると主張する。

キーワード　現代日本語　意味論　とりたて詞　モダリティ　**non-at-issue meaning**

1. はじめに

- とりたて詞ダケと対比のハは組み合わせてダケハとして用いることができる。

(1)　（お願いだから）命ダケハ助けてくれ。

- ダケハは、下記にみるようにダケ単体、ハ単体には見られない 2 つの意味的特徴を持つ。以下にみるダケハの特徴は、文の意味を構成的に分析するアプローチにとっては深刻な問題である。この発表は、これらの問題を解決し、ダケハの意味をダケとハの意味的性質から構成的に導くことを試みる。

2. 現象の観察：ダケハをとりまく 2 つの問題

2.1. 問題 1: ダケハの分布制約

- ダケ単体、ハ単体の場合、ダケやハが用いられる文のタイプには制約がない。
- しかし、ダケハの場合、単純な質問に対する答えとして用いると、ダケ単体、ハ単体と比較して不自然に感じられる。

(2)　誰が来たの？

a. 太郎ダケが来たよ。

b. 太郎ハ来たよ。

c. ?太郎ダケハ来たよ。

- ダケハが典型的に用いられるのは、「(最低限) 必須である」というモーダルな意味を表す文である。

(3) 一人暮らしするなら、炊飯器ダケハいいものを買いたい。(願望モーダル)
(4) 間違いなく太郎ダケハ来たみたいだ。(認識モーダル)
(5) なんとしても娘ダケハ助けなければならない。(義務モーダル)
(6) どこに進学するのでも、英語ダケハ勉強しておいたほうがいい。(目的論的モーダル)
(7) 何があっても娘ダケハ助けてくれ。(依頼・命令)
(8) どんな時でも、朝食ダケハ抜かなかった。(事態の量化)

2.2. 問題 2：ダケハ文におけるダケの排他的意味の消失

2.2.1. ダケの排他的意味

- ダケが単体で用いられた場合、「x ダケ P」は、肯定命題を主陳述（いわゆる「主張」）とし、排他命題を第二陳述として表す（久野 1999。森田 1980, 寺村 1991 も参照)。

(9) 太郎ダケが来た。
a. 太郎が来た。(肯定命題)
b. 太郎以外の人物は来なかった。(排他命題)

- ダケの排他命題はキャンセル不可能であり、会話の推意とは異なる「主張」の一部である (Yoshimura 2007, Ido & Kubota 2021)。

(10) 太郎ダケが来た。#そして、次郎も来た。

- しかし、ダケハ文においてはダケの排他命題が一見したところ消失し、ハ単体の文と変わらなくなっているように見える。

(11) <u>他の病院は分からないけど</u>、あの病院｛ダケハ/ハ/#ダケ｝間違いなく危険だ。

- これらの「ダケハの分布制約」や「ダケハ文におけるダケの排他的意味の消失」は、ダケ単体、ハ単体の意味からは直ちには導かれない性質であり、意味を構成的に組み立てようとするアプローチにとっては、分析の課題となる。

3. 先行研究

3.1. Hara (2007)

- Hara (2007)は、ダケの意味とハの意味を組み合わせると語用論的な不整合が生じることを予想するが実際はダケハ文は問題なく用いられることを指摘し、これは、ダケが命題レベルより上位の‘potential literal act’の上でスコープをとり、ダケは概略、「代替集合の要素については、主張していない」ことを示すとためと分析する。
  - potential literal act (Siegel 2006):
    [Potential literal acts] are abstract objects consisting only of propositional content and whatever illocutionary force potential can be read directly from their morphosyntactic form, not necessarily the actual illocutionary act that might be performed.

(12) JOHN-dake-wa came. (Hara 2007: (39))

a. B= λx. x came. F=John
b. assertion: John came.
c. conventional implicature 1, Con(B)(F): The speaker considers the possibility that ‘Mary came’ is false.
d. conventional implicature 2, dake(B)(F): There is no assertion of Mary with respect to the question λx. x came.

3.2. Hara (2007)の問題点

- 概念的問題：概念の内実が不明瞭である。potential literal act は発話行為でありながら命題的オペレータのスコープに入る要素と扱われているが、命令や依頼も一旦命題内容に還元するのか、その場合、命令や依頼の speech act としての force をどうやって取り戻すのかといった問題が残る。
- 経験的問題：ダケハ文がモーダル文に典型的に用いられることを説明できない。

4. 分析に用いる概念

4.1. ダケの分析（Ido & Kubota 2021）

- ダケは肯定極性の最大値演算子を表す (Tomioka 2015)

(13) ジョンだけが来た。

a. max(come) = j
b. 述語 come を満たす最大の個体/個体の集合はジョンただ一人からなる

- ダケの排他命題はキャンセル不可能であり、文のキャンセルできない帰結は「狭義の含意」「論

理的帰結 (entailment)」「前提 (presupposition)」「慣習的含意 (Conventional Implicature; CI)」などの可能性がある。ここでは、ダケの排他命題は Ido & Kubota (2021)に従い、「派生的含意 (derived entailment)」であると仮定する。[1]

- **派生的含意 (derived entailment)**：
  狭義の含意と前提の組み合わせから帰結する命題 (Kubota 2012)

(14) 「太郎ダケが来た」の意味

a. 太郎が来た。
（「P を満たす最大の個体（の集合）は x」という狭義の含意から生まれる直接の帰結）

b. 他の人は来なかった。
（x が P を満たす最大の個体なので x 以外は P を満たさないという、max の定義から帰結する派生的含意）

4.2. 対比のハの分析

♦ 対比の「x ハ P」は、P(x)を表し、一方である種の「不完全性」「不確実性」を表す（Jackendoff 1972, Büring (2003)ほか, 日本語については三上 1963, Hara 2006, 冨岡 2010 ほか）。ここでは表記の簡便さを優先し、「x 以外については（話者の知る限り）不明である」ことを表すとしておく[2]。

(15) 太郎ハ来た。

a. 太郎が来た。

b. 太郎以外の人物については（話者の知る限り）不明である

5. 提案

♦ **本発表の提案：**

<u>単純な文では、ダケの意味とハの意味を組み合わせると語用論的な不整合が生じるが、「(最低</u>

[1] 久野 (1999)などが指摘しているように、ダケの排他命題は肯定命題のようにメインの主張とは異なり「背景化」している点で、肯定命題とは意味的なステータスが異なる。一方で、モーダルや条件節、疑問節の影響を受ける（いわゆる「投射 (projection)」が起きない）点で、（典型的な）前提や慣習的含意とも異なる。Ido & Kubota (2021)ではこのようなダケの排他命題の特徴を、ダケの肯定命題はダケの最大値演算子による直接的な狭義の含意であり、排他命題は最大値の意味の論理的帰結として立ち現れる派生的な含意であるとする分析を提案している。

[2] 三上(1963)では、佐久間(1952)に従いハの性質を（代替集合の要素については解説の圏外であるという意味で）「不問」であるとして、「不問」と「対比」の境は明瞭ではないと述べている。対比のハの含意が明確な対立命題の否定を表している場合については 6 節を参照。

限）必須である」というモーダルな意味を表す文脈ではその不整合が解消される。

- ダケやハの意味に特別な仮定をする必要はない。

♦ 単純な文では、ダケの意味とハの意味を組み合わせると語用論的な不整合が生じる (cf. Hara 2007)

- (16b)(16c)にみるように、他の人について「来なかった」と（実質的に）言っているにも関らず、とりもなおさずその命題の真偽に関するコミットメントを避けるのは、発話の提示の仕方として一貫性に欠ける。

(16) Q: 誰が来たの？ — A: 太郎ダケハ来たよ。

a. 太郎が来た（ダケの肯定命題）

b. 太郎以外は来なかった（ダケの排他命題）

c. 太郎が来たことは確実だが、他の人については知らない（ハの留保含意）

♦ 一方で、「（最低限）必須である」というモーダルな意味を表す文脈においては、ダケの意味とハの意味が近似し、上述の不整合が解消される。

- (17b)(17c)にみるように、モーダルな意味を表す文脈においては、ダケの排他命題はハの留保含意に近似する。

(17) 間違いなく太郎ダケハ来たようだ。（認識モーダル）

a. 間違いなく太郎が来たようだ（ダケの肯定命題）

b. 他の人については、話者が「間違いなく来たようだ」とまでは判断できない（ダケの排他命題）

c. 太郎については「間違いなく来たようだ」が成り立つが、他の人については分からない（ハの留保含意）

♦ そのほかの具体的な例の分析：

(18) どんな時でも、朝食ダケハ抜かなかった。（事態の量化）

a. どんな時でも、朝食を抜かなかった（ダケの肯定命題）

b. 朝食以外（昼食や夕食）については、「どんな時でも抜かなかった」とは限らない。（ダケの排他命題）

c. 朝食については「どんな時でも抜かなかった」が成り立つが、朝食以外については分からない（その限りではない）（ハの留保含意）

(19) 命ダケハ絶対助けて下さい。（命令・依頼）

a. 命を絶対に助けてほしい（ダケの肯定命題）

b. 命以外については、「絶対助けてほしい」と話者がお願いしているわけではない。（ダケの排他命題）

c. 命については「絶対助けてほしい」とお願いしているが、命以外については分からない（その限りではない）（ハの留保含意）

♦ **この提案に必要な仮定：**ダケハはダケもハもモーダルより高い位置でスコープを取る。

(20) ダケ文: [Op_W [x-dake P_W(x)]]
ダケハ文: [x-dake-wa [Op_W P_W(x)]] (Op は world variable を束縛する何からのオペレータ)

♦ (20)の仮定は、[1]ダケ単体は通常、(21)のように他のオペレータより低いスコープを取ること（cf. Sano 2001, 茂木 2004 など）、[2]ハ単体は(22)のように他のオペレータより高いスコープを取ること（cf. Hara 2007, 冨岡 2010, 井戸 2021, 2023）から、[3]ハが後接したダケはハにつられて高い位置でスコープを取るとすることで自然に導かれる。

(21) #命ダケを絶対助けてください。
（「命を助けて、命以外を助けない」ということを絶対してください。）

(22) 命ハ絶対助けてください。
（命については、「助ける」ことを絶対にしてください。（それ以外については、絶対してほしいとは言っていない））

6. 一見反例に見える現象：モーダルのない文におけるダケハ

♦ (23)–(24)のように、「（最低限）必須である」というモーダルな意味のない文でダケハが用いられている例があり、一見本分析が当てはまらないように見える。

♦ (23)–(24)は、モーダルと共起している(11)とは対照的に、ダケ単体・ハ単体・ダケハのいずれも同様に出現する点に注意。

- (23)–(24)のようにあらかじめ先行文脈において代替集合の要素が not P であることが示されている場合は、代替集合の要素が not P であることが確定しており、ハの留保含意は実質的に機能していない。
- ダケ単体・ハ単体のどちらを用いても両者の意味に実質的な差異はなく、これらの文脈では、ダケの排他命題とハの留保含意が意味的な衝突を起こさない。

(23) <u>その手の店でいっしょに過ごした友人たちの顔も名前も、いまとなっては思い出せない。</u>しかし、バーテンダーの名前 {だけは／ダケ／ハ} 覚えていた。(BCCWJ:

LBp9_00170 64530)

(24) 他のメーカーの 蜂蜜ではならないのに、このメーカーの蜂蜜{だけは／ダケ／ハ}そうなります。(BCCWJ: OC08_03420 1090)

7. 結論

♦ **本発表の結論：**

- ダケハに見られる２つの意味的特徴は、ダケがモーダルより高いスコープを取ると仮定することでダケとハの意味から構成的に導くことができ、その際にアドホックな理論装置や操作を仮定する必要はない。

謝辞　本研究は JSPS 科研費 18K1239、国立国語研究所共同研究プロジェクト「計算言語学的手法による理論言語学の実証的な方法論の開拓」の支援を受けたものである。

参考文献

久野暲 (1999) 「「ダケ・シカ」構文の意味と構造」アラム佐々木幸子(編)『言語学と日本語教育実用的言語理論の構築を目指して』pp. 291−319, くろしお出版.

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ) https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/

佐久間鼎 (1952) 『現代日本語法の研究』恒星社厚生閣.

佐野まさき (2001) 「日本語のとりたて詞の素性移動分析と Minimality 効果」『日本英語学会第 18 回大会研究発表論文集(JELS18)』pp. 181−190.

寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味 III』くろしお出版.

冨岡諭 (2010) 「発話行為と焦点主題」長谷川信子(編)『統語論の新展開と日本語研究』p. 301–331, 開拓社.

三上章 (1963) 『日本語の論理』くろしお出版.

茂木俊伸 (2004) 「とりたて詞文の解釈と構造」筑波大学博士論文.

森田良行 (1980) 『基礎日本語 2』角川書店.

Büring, D. (2003) On D-Trees, Beans, And B-Accents. *Linguistics and Philosophy* 26, 511–545.

Hara, Y. (2006). Grammar of Knowledge Representation: Japanese Discourse Items at Interfaces. Ph.D. thesis, University of Delaware.

Hara, Y. (2007). *Dake-wa*: Exhaustifying Assertions. In: Washio, T., Satoh, K., Takeda, H., Inokuchi, A. (eds) *New Frontiers in Artificial Intelligence. JSAI 2006. Lecture Notes in Computer Science*, vol 4384. Springer.

Ido, M., & Kubota, Y. (2021). The Hidden side of Exclusive Focus Particles: An Analysis of *dake* and *sika* in Japanese. *Gengo Kenkyu*, 160, 183–213.

Jackendoff, R. (1972). *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT Press.

Kubota, Y. (2012). The Presuppositional Nature of *izyoo*(*-ni*) and *gurai* Comparatives: A Note on Hayashishita (2007). *Gengo Kenkyu*, 141, 33–46.

Siegel, M. (2006). Biscuit Conditionals: Quantification Over Potential Literal Acts. *Linguistics and Philosophy*, 29, 167-203.

Tomioka, S. (2015). (Non)-exhaustivity of *dake* 'only'. In: *Nihon Gengo-Gakkai Dai 150-kai Taikai Yokooshuu* [Proceedings of the 150th Meeting of Linguistic Society of Japan], 134–139.

Yoshimura, K. (2007). What Does ONLY Assert and Entail? *Lodz Papers in Pragmatics*, 3, 97–117.